



図書館情報センター だより

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL. 0956-47-2191(代表) http://sun.ac.jp/lib

2009.1 No. 11

自分を耕す

木村道夫

(理事長)

「耕す」とは普段は田圃や畑を耕すというように用いられますが、「耕す」ことは成長を促す肥沃な土壌作りであります。肥沃な土壌ほど美しい花が咲き、豊穡の実が繁ります。美しい花も豊穡の実も肥沃な大地の恵みであります。この肥沃な大地を準備する作業が「耕す」ということであります。

翻って「自分を耕す」とはどういうことかということ「自分の可能性を大成させること」であり、そのために「学びを続ける」ことであると考えます。

「三耕」という言葉があります。「書物で学ぶ」「経験したことから学ぶ」「人から教えを受けて学ぶ」ということですが、「学ぶ」ということは単にもの知りに成るということではなく、成功するための知恵を磨くということでもありません。又、「学ぶ」ということは決して生易しいものではなく、これで終わりということでもありません。それだけに学び続けるということはなかなか大変な修練ですが、生涯が学びの場であり、学びの期間であります。あるレベルで満足することなく未来志向で学び続けることこそが自分を耕し続けることだと考えます。ひとり一人が本来的に有する資質、可能性が、学び続けることによって叡智の深さ、人徳の豊かさ、可能性の大きさとなって、大きな器量を有する人材として信頼と敬愛を受けることができるのだと思います。

「今の一当は百不当の一老なり」と道元和



尚は説いています。何百回・何千回弓を引いても的を外れていた矢がやつの的の芯を射抜けたということはそれまでの努力の結果であり、何事も継続は力をもたらずものだという大意であります。我々は本能的に「苦を避け、楽を求める」行動性もっていますので、これをうまく制御し努力を続けるということは決して楽なことではありません。だからといって「果報は寝て待て」式に他力本願では目標とするものの方から近づいてくることは有り得ないのでありますから、自ら目標に立ち向かう勇氣と行動こそが自分を耕す力となるものだと思います。

大リーグで活躍するイチロー選手は道元和尚流に捉えればまさに「^{イチロー}一老」という文字がぴったりであります。目標に向かって己を耕し続けたことによって今日の彼があるのであって、天才といわれる人に共通するものは好奇心、向上心そして弛まぬ研鑽と努力であります。

特に「心を耕す」ためには「書物に学ぶ」事が何より大事なことだと思います。書物に学ぶことを通して、新しい知識や情報に接して「知らざるを知る」ということに限らず、物の見方・考え方の多様性や体系的な考察力、多彩で的確な表現力を培い、考える基礎力を深化させることができます。それによって人の心をわが心として映し出す感性も広がるはずです。

学生諸君にとってキャンパスライフはまさに「三耕」を重ねるに最も恵まれた時間です。県立大に学ぶ諸君が、自分をしっかり耕して飛躍の土壌を整え、それぞれの大道を闊歩されんことを期待してやみません。



自著を語る

郊外からみた都市圏空間
— 郊外化・多核化のゆくえ —
(海青社、2008年10月刊行、3,400円+消費税)

石川 雄一
(地域政策学科)

多くの文系学者が読書好きなのに反して、私は子供の頃から本を読むのが好きでなかった。その代わりに図鑑のビジュアルな写真やグラフィック、統計を眺めるのが大好きであった。大学では地理を学んだが、そこでは他の専攻では学ばない地図投影法から読図・作図法（その頃は製図ペンを使用した手書き）、さらに地図のない未開社会でのフィールドワークに困らないために、簡単な測量技術も学んだ。そんな私なので、ふだんの論文作成時、文書を書くよりも地図を描く方が楽しく感じる。

ここで紹介する自著は、都市地理学の専門書である。現代社会は都市の時代、都市地理学といってもその領域はますます広大になりつつあり、歴史・文化から気候や防災まで、また経済学、社会学、行政学、建築学などの他の科学とクロスオーバーするところも多い。そして地理学は時空間の科学である。空間を二次元的に捉え、ある場合には三次元的に捉え、分布パターンや時間の経過に伴いどのような変化が生じるのかを分析する科学である。したがって本書は、タイトルとサブタイトルにあるように、ジオグラファー（地理学者）の目から空間の構造変容を、都市圏郊外からの視点を中心にまとめたものである。そしてその主たるキーワードが「郊外化」、そして私が次のステップと考える「多核化」ということになる。

「はじめに」の部分で述べているように、人類史上、人類の手によって最も劇的な変化

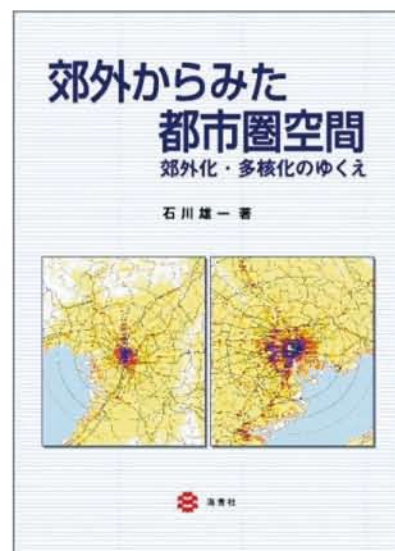
を短期に遂げた空間は郊外であろう。私の講義ではよく宮崎駿のアニメ『となりのトトロ』を話題にするが、あの森に囲まれ低地に水田、丘陵地に畑が広がるのどかな田園地帯が、わずか二十数年で巨大都市化地域に変貌したのである。ワシントンポストの記者であるJoel Garreauのアメリカ合衆国の多核化を取り上げた本『エッジシティedge city』の冒頭には、ワシントン郊外タイソズ・コーナーで撮影された時代の異なる2枚の写真が掲載されている。一枚は森に囲まれた未舗装道路の交差点に小さな商店がある戦前期の風景写真、もう一枚はビルと駐車場と高速道路に囲まれた大規模オフィス・小売センターに変貌した80年代のものである。私も2002年に訪れた場所である。同じような郊外の風景の変化は、少し遅れて日本でも生じている。「あとがき」に記したが、私が都市地理研究のなかでも、郊外に視点をおいた研究を続けているのは、高度経済成長の真っ只中であった少年期に大阪郊外で暮らし、郊外の変容を目の当たりに体験したこと、まさにこうした現象の時空間軸のど真ん中にいたことが、最も強く影響していると思っている。

本書の構成であるが、序章と終章のほかに本論10章から構成されている。さらに本論は3部構成となっており、第I部では日本の都市圏・大都市圏全般に関する動向、第II部では大都市圏の事例として京阪神大都市圏の動向、第III部では中規模都市圏の動向を述べている。また序章以外は地図を多用しているので、全体のページ数の中に占める文字情報の割合は少ない。通常の日次のほかに、図表目次も付けている。地理学では、記述よりも地図で表現した方が説得力のある場合が多く、たくさんの地図を自ら作成し利用するが、これらの地図には、文字情報をはるかに超える情報が含まれているものと理解していただきたい。また地図の作成には、情報の入手・分析の段階から相当の時間を費やしている。

この本の読み方であるが、教職の中学社会・高校地理免許取得希望の学生は全員理解していると思うが、地理学には、理論や法則を追求する系統地理学と地域の描写に力点を置いた地誌とがある。序章と終章を両軸に、一般的な流れは系統地理的アプローチで書かれているが、本論の各章を読むときには地誌的アプローチも駆使して、それぞれの地域の個性も読み取ってほしい。また各章のタイトルにもなっているキーワードを的確に読み取ってもらえば、それぞれの章のつながりがみえてくる。流れのある構成にしてあるので、序章から順に読んでいただきたい。各章はそれほど長くなく、序章の内容を理解していれば、一気に読まなくても十分にわかるようになっている。また図表類には力を入れたので、できる限り図表をしっかりと見ていただきたい。ちなみに本のカバーは、出版社のフォーマットをもとに、私がデザイン・作成したものである。

参考文献

Garreau, J. (1991) : Edge city: Life on the new frontier. Doubleday, New York, 549p.



私をかえた一冊の本

方法序説 (岩波文庫)

西 道彦

(経済学科)

今から20年以上前に、私は日本から遠く離れた赤道近くの発展途上国を訪れる機会を得ました。学生の皆さんがまだ生まれる前の話です。その国では象がまだ材木の運び出しなど労働手段として活躍していました。

その頃の日本は、技術革新によって世界のトップクラスの工業国に躍進し、貿易では自動車などの工業製品の輸出急増で大幅な貿易黒字を出し、国際経済摩擦が生じていました。車検を待たずに車を買って替える人が珍しくなくなった時代でした。

一方その国では、日が暮れても人々は道路端に座って、なかなか家の中に入ろうとしませんでした。理由を同行している現地の案内人に聞いて見ると、電気がなく、家にいるよりも外が明るいとのことでした。政情も宗教対立に起因する民族紛争により、テロ行為が街中では頻繁に起こっていて、犠牲者が出た事件の報道が滞在中も流れていました。私たちも街中にはなるべく近づかないようにしていました。

このような国情にも関わらず、南部は比較的安定していることもあり、遺跡等の見学は絶えることはなく、熱心な信者をはじめとして一般の観光客もしばしば見かけました。観光地では至る所で物乞いをする人々を目にしました。片手片足がない子供を抱きかかえた父親や母親らしき人が観光客に近づいて来ます。現地の案内人の説明によると、五体満足に生まれた子供の片手や片足を物乞いをするために切り落とすとのことでした。この事実を知った瞬間に、私は気が狂わんばかりに動

揺しました。可哀想でその子供たちの父親母親に対する怒りの気持ちが収まりませんでした。許せませんでした。滞在中、私の脳裏からこのことが離れることはありませんでした。

帰国後もずっとなぜこのようなことが行われるのか、自問自答する日々が続きました。貧しさ故の行為、家族が生き延びるための行為……そうであれば貧困を解消するための発展途上国支援のあり方など自分なりに考えて見ました。しかし如何に貧しいとはいえ、このようなことを人間はなぜするのか、人間の本質的な部分にしたいに関心が行き、知らぬ間に哲学書にも手を付けて、自分なりの答えを探していました。人間の理性に疑問を持ち始めていました。

そのような中で、文庫本ではありますが、デカルトの『方法序説』(岩波文庫)の一文「良識あるいは理性とよばれ、真実と虚偽とを見わけて正しく判断する力が、人人すべて生まれながら平等である……私どもの意見の多様なのはある者が他の者よりよけいに理性を具えたところからくるのではなく、私どもが思想を色々ちがった道でみちびくところから、同じような事を考えるわけでもないところからくるのである。」が目につきました。そうであれば、良き精神を正しく働かせることが大切となります。少し光が見えた感じになりました。

教育の重要性を再認識し、世界の貧しい人々に広く教育を受ける機会を提供するために、豊かな国は協力を惜しまないことが肝要です。私はそれ以来、ユニセフに気持ちばかりの寄付をしています。



私が若い頃に読んだ本

阿部律子

(地域政策学科)

執筆依頼を受けた時、はたと困ってしまいました。「私を変えた一冊」がどうしても思い浮かばなかったからである。本を読んで感動したとしても、それは自分の存在を変えるまでには至らなかったからである。むろん前号で岩井先生が書かれたフランクルの『夜と霧』は当時学生であった私にとっても大変衝撃的な本であった。ナチの非人道的行為、それに加担したドイツ国民、戦争の不条理、ユダヤ民族、ホロコースト、生きるということ、さまざまなことを考えさせられた。しかし、それは私を揺さぶりはしたが、変えはしなかった。

先日久しぶりに実家に帰ったついでに自分が若い頃にどのような本を読んでいたのか本棚を見てみた。物理学から、心理学、哲学に至るまで多様なジャンルの本が並んでいた。大学ではフランス語を専攻したものの、語学は将来の仕事のスキルのためと捉え、フランス文学や小説の類にはあまり興味を示さず、文学以外の本をよく読んでいたように思う。

それでは、私が若い頃に読んだ本を少し紹介してみたい。まず、歴史関係の本が少なからずあった。その多くはヨーロッパやフランスの農村や農民に関するものである。井上泰男著『西欧社会と市民の起源』、伊藤栄著『ヨーロッパの荘園制』。当時フランス歴史学のアナール派についてはほとんど知識もなかったが、よく読んだようである。マルク・ブロック著『歴史のための弁明』、ルフェーブル著『フランス革命と農民』、ルッチスキー著『革命前夜のフランス農民』、ソプール著『資本主義と農村共同体』。また、岩波新書で『世界史概観上』、『世界史概観下』、『ニュートン』、

『コロンブス』等。本棚にはなかったがマックス・ウェーバーも読んだ記憶がある。また、森嶋道夫の本は面白く読んだ。手元にあるのは岩波新書の『イギリスと日本』、『続イギリスと日本』だけであるが、彼の世界経済の本も読んだ憶えがある。珍しくフランス文学の本が1冊、ディドロの『逆説・俳優について』があった。この演劇論の中では「名優の中には冷静な観客がなくちゃならないんだ」という箇所に線を引いている。教師もよりよく伝達するためにある意味演じる者である。自己を、教える自分と教室の後ろで教える自分を見つめる観客の自分に二分化し、自己を客体化し、そこに省察を加え、教師としてよりよい教え方、授業のあり方を模索する。そうした姿勢を教えてくれたように思う。

これまでさまざまな本を読んできた。確かに自分を変えるような本には巡り会わなかったし、読んだ本の内容も遠い過去の記憶の彼方へと消えていったが、読んだものは知らず知らずのうちに自己の存在の糧となり現在の自分を形成しているように思われる。読むジャンルが多様であればそれだけ豊かな自己を形成するのではないかと思われる。



現代流通経済論

山口夕妃子

(流通・経営学科)

「私の人生をかえた1冊の本」を紹介してほしいと依頼を受けたとき、引き受けたものの正直悩んでしまった。本で人生がかわったというより、人生の転機に様々な書物に接し、様々な考え方や感じ方を学び、その転機を自分なりに向き合っていたという方が私の場合は正確な表現だろう。その意味において「私の人生をかえた」書物はたくさんある。勇気、元気をもらった本、選択肢をひろげてくれた本、考え方に深みを与えてくれた本、思いつめていた考え方に笑いをもたらしてくれた本などなど。

「図書情報センターだより」で紹介することなので、卒論や修論で悩んでいる学生へのメッセージを込めて、私の大学院の指導教員である阿部真也先生の『現代流通経済論』をご紹介したい。この本は、商品流通、貨幣流通、情報流通、および価格機構という4つの編からなり、それらの諸要素の統合によって現代の流通を総体的に捉えた本である。

この本にはじめて出会ったのは、大学院を受験する直前に訪れた書店である。箱に入り、薄い透明な上質の紙にその本は包まれていた。読んでみると、とても難しく、基礎知識なしに読める本ではなかった。実際に読んだのは、大学院に入学した後であり、講義を通じて指導教員の指導のもと読み進めていった思い出深い本である。

この本は「科学的知識の発展は、専門化と統合化という2つの過程をくりかえしながら進んできた。…(中略)…専門的研究の深化は、それらの研究の出発点となった新しい法則的関連の認識を通じて、次第に古い理論枠組みにかわるあらたなパラダイムの基礎をつ

くりだす。」という文章から始まる。

私自身の研究課題における問題意識は現代的な問題から生じてきていることが多い。ただその問題意識を、上述の「古い理論枠組み」をしっかりと認識したうえで、現代的な問題や課題にあてはめていくものだと思う。しかし、現代的な問題や課題を既存研究の枠組みの中で捉え、解釈し、そこに抱える課題を探っていくということは難しい。

今、卒論や修論を抱えている学生の多くのテーマも現実的な問題から生じていることが多いだろうし、それに対する解を具体的に求めていることが多いだろう。その際には、ぜひ、上に書かれているように、必ず先行研究にあたり、どのように議論されていたのかを理解し、そのうえで論を進めていってほしい。

とはいえ、私自身も模索中であり、この本に書かれているような専門的研究の進化や統合化をすすめているとは言えない。しかし、このような枠組みで研究の方向性を見出していきたいと常々思っている。論文を書くとき、必ず手元においておく本の一冊を今回はご紹介させて頂いた。



利用しやすい図書館・社会に貢献する図書館

シーボルト校附属図書館の紹介

本館は、近代日本を開拓したシーボルトの鳴滝塾精神を受け継ぐものとして、平成11年に（旧）県立長崎シーボルト大学開学時に開館しました。当図書館は、大学の掲げる理念・目的に沿い、計画的に蔵書数の拡大を図る一方で、広く県民にも開放してきましたが、平成20年4月に（新）長崎県立大学が開学し、新たに『長崎県立大学シーボルト校附属図書館』としてスタートしました。

大学は、長崎市に隣接した長与町の自然も豊かな丘陵地にあり、周辺には団地も多く、教育の場として最適な環境にあります。

図書館は、キャンパスの中心部に位置し、鉄筋コンクリート3階建てです。全体的にスペースにはゆとりがあり、広く明るい閲覧室は暖かな太陽の光が降り注ぐように設計されています。

1 図書館の概要

所蔵資料等の状況は次のとおりです。

- ・和書 157,059冊
- ・洋書 34,820冊
- ・学術和雑誌 338種
- ・学術洋雑誌 326種
- ・視聴覚資料（DVD等） 7,035種
- ・オンラインジャーナル 84タイトル
- ・データベース 7タイトル

1階閲覧室には、指定図書、郷土資料、女性学図書、哲学・歴史関係図書などを配架しています。また、視聴覚コーナーにはパソコン10台とAV機器類20台を設置し、インターネットを利用した情報検索をすることができ、AV資料を利用した学習ができます。利用時間に制限を設けていますが、常に満席状態です。

2階閲覧室には、大学の専門領域である社会科学、自然科学、医学、看護及び外国書な

どが配架されています。また、和雑誌及び欧米やアジアなどの雑誌も充実しています。

3階は書庫ですが、和・洋雑誌バックナンバーや新聞バックナンバーを保存しています。学生は自由に入室・利用ができます。



2 利用について

開館時間は次のようになっています。

平日 8:30～22:00

土曜 9:00～17:00

3 貸出の現状

平成19年度の学生の貸出人数9,487人、貸出冊数18,122冊。学外利用者は貸出人数3,210人、貸出冊数6,995冊。年間入館者数は163,794人でした。（すべて延べ数）

区分	図 書		雑 誌	
	貸出冊数	貸出期間	貸出冊数	貸出期間
教 職 員	5冊	2週間	最新号1冊 それ以外3冊	一夜 3日
大学院生	10冊	4週間	最新号1冊 それ以外3冊	一夜 1日
学 生	5冊	2週間	最新号1冊 それ以外3冊	一夜 1日
学 外 者	3冊	2週間		

今後も「利用しやすい図書館・社会に貢献する図書館」を目標に、スタッフ一同努力してまいります。

附属図書館からのInformation

附属図書館では、専門書だけでなく、ベストセラーの一般書や雑誌をはじめ、DVDやCDなどの視聴覚も充実しています。DVDコーナーでは、話題の映画も続々入荷。リクエストも受け付けています。このほか、次に紹介しているような社会問題を取り上げた内容のビデオやDVDなど、幅広く取り揃えていますので、ぜひ、ご利用ください。

おすすめ視聴覚



〈DVD〉

「ビジュアル臨床心理学入門」全20巻

うつ病やニートといった今日のテーマについてもわかりやすく解説した最新の教材です。

「世界に衝撃を与えた日」全30巻

ベルリンの壁崩壊やダイアナ元皇太子妃の死など、歴史的事件に焦点をあてたドキュメンタリーです。

「アウシュビッツ」全5巻

アウシュビッツ強制収容所解放60年を機に、その真実に迫るドキュメンタリーです。

「映像100年史 日本の記録」全33巻

明治から平成の日本を映像で振り返ります。当時の新聞記事も収録しています。

「CEO EXCHANGE」全20巻

世界のトップ企業家39人が出演しており、21世紀の経営のノウハウが学べます。

〈DVD-ROM〉

「人民日報」

1946年から2003年まで。ディスク16枚とUSBが付いています。



附属図書館ホームページリニューアル

佐世保校、シーボルト校附属図書館のホームページが新しくなりました。

開館カレンダーや図書館からのお知らせなど、様々な情報を掲載しています。どうぞ、ご活用ください。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/lib>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集責任／長崎県立大学経済学部取書委員会 発行所／長崎県立大学佐世保校附属図書館 発行日／2009年1月6日